

音楽と造形の総合的な表現の可能性

—「保育内容指導法（表現）」の授業における試み—

山 野 てるひ

(初等教育学科教授)

ガハプカ 奈美

(初等教育学科准教授)

岡 林 典 子

(初等教育学科准教授)

1. はじめに

平成元年の幼稚園教育要領の改訂、および平成2年の保育所保育指針の改定により、従来の保育内容で示されていた領域「音楽リズム」や「絵画製作」は、発達の視点から捉えなおされ、感性と表現に関する領域「表現」として大きくあらためられることとなった。それは保育における「音楽」と「造形」のあり方が問い直されるきっかけともなり、今般平成20年の改訂においても引き継がれ、さらに教育要領、保育指針両者における領域「表現」のねらいと内容の整合が強められている。

本来、子どもはさまざまな身体感覚を伴った経験から蓄積されたイメージを、身振りや音声や色や形などを総合的に用いながら自分なりの方法で表し、伝えようとする。そうした子どもと関わる保育者に求められるのは、子どもに豊かな感性が育つように環境を整え、子ども自身が独自の方法を用いて表現する楽しさを味わえるように働きかけ、総合的な子どもの表現を受けとめてゆく力である。

しかしながら、今日においてもなお多くの保育の現場では子どもの総合的な表現を育む指導が十分になされているとは言い難く、音楽表現活動、造形表現活動、身体表現活動が分断される形態で保育されているのが実情であろう。椋田(2008)は京都市内にある3園の幼稚園の教諭に対してアンケートをとり、「絵画制作・音楽リズムを一体的に扱った保育ができない理由」として次の3点を挙げている¹⁾。

①園の方針で毎週やることが決められていて一体的に取り扱えない。

②一体的な保育を見たり、体験したことがないのでやり方がわからない。

③別々のほうが子どもにはわかりやすい。

これら3つの理由は、領域「表現」のねらいが未だ園や保育者に浸透していないことを示しているが、われわれ執筆者はその中でも特に②に注目した。そこには、保育者が総合的な表現を育む指導をしたいと望んでも、自身が実際に体験したことがなく、指導の方法が分からないという、保育者養成課程における「表現」の指導法や指導内容に関わる問題が浮かび上がってくる。

そうした問題の背景には、幼稚園教諭や保育士の養成機関における保育内容「表現」に関わる科目のあり方が本質的に検討されないままに、音楽、美術、体育などを専門領域とする教員のリレー式の授業が展開され、それらの関連を統合することが主に学生自身に委ねられているという実態がうかがえる。

近年では、「保育者養成において学生に『表現』をどのように指導するか」というテーマで4年に渡って保育学会の自主シンポジウム²⁾が組まれ、保育者養成機関における「表現」の指導についての検討がなされているが、具体的には音楽的側面を中心にした内容である。

一方、子どもの本質的な表現の育ちを見据えて、「音楽」と「造形」を融合した授業展開を試みようとする動きも生まれている。今川ら(2005)は、音楽と造形を総合した視点から保育者養成課程における領域「表現」にかかわる授業のあり方を模索し、2つの視点が融合された授業展開を試みている³⁾。また、宇佐美ら

(2007)は、保育者が「表現」に関する多様な価値を見出すことができるような授業を構成することを目指し、音楽教育と美術教育の教員2名で「保育内容表現」の授業改善に取り組んでいる⁴⁾。

このような動きを背景に、子どもの総合的な表現を受けとめ、育むことのできる保育者の養成に向けて、われわれ執筆者3名は音楽教育と美術教育の立場から「保育内容指導法（表現）」の授業内容を検討し、2008年度前期より新たに音楽と造形が相互に交流する授業展開を共同で行うことを試み始めた。

そこで本稿では、2008年度前期に行った1回生2クラス（全4クラス）の「保育内容指導法（表現）」の授業について、実践内容と学生の意識調査の分析をもとに、表現科目における音楽と造形の相互交流の可能性を探ることを目的とする。

2. 音楽・造形のカリキュラムと「保育内容指導法（表現）」の位置づけ

音楽や造形といった芸術分野の科目の学びと科学分野の科目のそれには、いくつかの大きく異なる特性がみられる。たとえば、科学的分野は先人が積み上げてきた知識や成果を概念化し、効率よく圧縮して習得することがある程度可能である。それに対して、芸術は先人が既に到達

した成果であっても、その過程を個人が一から実際に追体験的に学習しなければ、習得や理解が難しい面がある。従って、芸術は概念操作による短期的な集中学習には向かず、時間をかけて体験的学習を継続しなくては効果が現れない。

以上の観点から本学科では音楽と造形に関する授業は、免許・資格に関わる必修科目に加えて、選択科目（音楽では「ピアノ入門」、「音楽あそび」、「音楽表現演習」を、また造形では「造形あそび」、「造形表現演習」）を設け、関心をもつ学生が短大での2年間に継続して学習できる機会を提供している（表1）。また、これらの科目を通して、音楽、造形の基礎的な感覚練習や技法・技術練習、および音楽の要素や造形的要素を核にしてあそびを展開する方法を学べるように編成している。

しかし、「保育内容指導法（表現）」は、これまで半期に90分1コマで15週に渡って開講され、授業内容は音楽的表現と造形的表現で二部構成されていた。そのため、学生は音楽や造形、言語、身体などをもちいて総合的に表される人間の表現について、体験的に理解を深められる状況にはなかった。そこで、われわれはまず時間数を半期に180分15週と倍増し、音楽的表現と造形的表現が緊密に関連する実習内容を担う科目として位置づけられるようにカリキュラムを検討した。

表1 初等教育学科における音楽・造形に関するカリキュラム

	1年次前期	1年次後期	2年次前期	2年次後期
音楽関係の科目	・音楽科教育内容論（必修）B・Cクラス	・音楽科教育内容論（必修）A・Dクラス ・ピアノ入門（選択）	・学校教育方法論〔音楽〕（選択） ・音楽あそび（選択）	・音楽表現演習（選択）
造形関係の科目	・図工科教育内容論（必修）A・B・C・Dクラス	・造形表現演習（選択）	・学校教育方法論〔図工〕（選択）	・造形あそび（選択）
音楽と造形の相互交流科目	保育内容指導法〔表現〕（必修）A・Bクラス	保育内容指導法〔表現〕C・Dクラス（必修）		

3. 音楽と造形の相互交流を図る授業の試み

(1) 授業の概要

現在、「保育内容指導法（表現）」は1週に1度、2コマ続き（90分×2コマ）で開講されている。本稿で取り上げるのは、2008年度前期に行われたA、Bクラスについてである。担当教員は、Aクラスの音楽がガハブカ、造形が山野である。またBクラスは音楽が岡林、造形が山野である。全15回の授業内容の概要は表2に示した。

(2) 授業内容の詳細

子どもの表現の芽生えに気づき、受けとめて、

育てるためには、保育者自身にも柔軟で幅広い総合的な感覚や感受性が求められる。例えば、リズムカルな音のまとまりに五感を集中させて聴いてみると、躍動感を感じたり、形や色が浮かんだり、暖かさや冷たさを感じとることもできる。ひとつの音の刺激に対して感じ方を広げることは、表現方法を広げることににつながる。そこで、われわれは子どもの表現を援助できる資質、能力の向上を目的として、本科目のねらいを以下の5点に定めた。

① 固定化された感性を開放する。

表2 全15回の保育内容指導法（表現）の授業内容

授業回	90分	90分
第1回	〈オリエンテーション〉 2時間連続授業形態の説明、領域「表現」について説明	幼稚園教育要領・保育所保育指針の確認
第2回	〈乳幼児の発達と音楽的表現〉 ①新生児期・乳児期（誕生から12か月ごろまで）	〈乳幼児の発達と造形的表現〉 ①造形表現の意味 ②なぐり描き期
第3回	〈乳幼児の発達と音楽的表現〉 ②幼児期（12か月から2歳ごろまで）	〈乳幼児の発達と造形的表現〉 ③象徴期～図式期 ④造形的表現活動の実際
第4回	〈乳幼児の発達と音楽的表現〉 ③幼児期（3歳ごろから就学まで）	保育実習に向けた視聴覚教材活用の練習と製作（教材紹介と計画案の説明）
第5回	計画案の提出と製作	教材製作
第6回	教材製作	教材製作
第7回	発表Ⅰ 相互評価と合評	発表Ⅰ 相互評価と合評
第8回	発表Ⅰ 相互評価と合評	発表Ⅰ 相互評価と合評
第9回	〈リズムを描く〉音と点、線、形、色	〈色の性質を学ぶ〉 三属性とトーン
第10回	〈旋律を描く〉音と点、線、形、色	〈楽曲を描画する〉 P. D. Q. Bachの曲からメモと下書き
第11回	〈楽曲を描画する〉 P. D. Q.バッハの曲の下書きを基に作品にする	〈音具を知る〉 音具の意味と発音原理・音具の紹介
第12回	〈音楽づくりのための参考曲の鑑賞〉 情景描写やリズムの反復、音色の違いや音の重なりなどが感じられる曲の鑑賞	〈音具づくり〉 6名編成のグループで、多様な発音原理をもつ音具を制作する
第13回	〈音具づくりと音楽づくり〉	〈図形楽譜作成のための練習と下書き〉
第14回	図形楽譜作成と発表にむけた練習	図形楽譜作成と発表にむけた練習
第15回	発表Ⅱと合評	まとめとアンケート

- ② 音・色・形・手触り・動き・空間などを関連づけながら表す体験をする。
- ③ グループによる創作活動をととして、相互にやりとりしながら表現する楽しさを味わう。
- ④ さまざまな素材から音を見つけ、音色・リズム・音の重なりなどの面白さを楽しむ。
- ⑤ 保育に用いられる描画材料や用具に親しみ、その特性を活かした表し方を工夫する。

ここでは、全15回の授業の流れの中で、音楽的表現と造形的表現の総合化を試みた第9回以降の授業内容と経過について詳細を述べる。

【第9回】

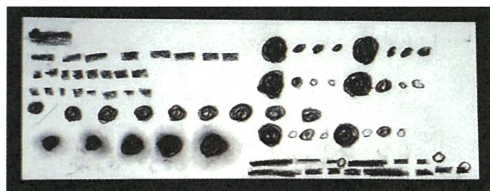
本時では感じた音のイメージを図形楽譜の作成へと導くために、音楽的側面からはリズム課題を設定し、五感を集中させて音を描くことを試みた。また造形的側面からは、色の三属性や三原色など、色の性質や秩序を把握することを目指した。描画材は保育の現場でも用いられるコンテパステル12色（以下パステルと略す）⁵⁾を使用し、用紙は八つ切り画用紙を横長に半裁したものを用いた⁶⁾。

〈リズムを描く〉—音と点・線・形・色—

- (1) 8拍のまとまりがある音のリズムを描く

黄土、こげ茶、グレー、黒の4色から1色を選び、8拍の音のまとまり（譜例1）を描いた。ここでの課題は、8拍の音を①稜線を利用して描く、②丸を描くように手を運ぶ、③強弱や休符を含んだ課題を描く、などである。写真1はこれらの課題を学生が描いたものである。

★譜例1



〈写真1〉8拍の音のまとまりを描く

- (2) 残響のある音のリズムを描く

音源として、シンバルをソフト撥や木の撥を用いて叩く、擦るなどして残響を作り出したものを提示した。それらの音を聴いて色や形をイメージし、ふさわしい色のパステルで描いた。

- (3) 高低のある音のリズムを描く

音高の違う木魚、ウッドブロックを木の撥で叩いて音源を提示した⁷⁾。音高判断の練習を数回行い、提示された音のリズムを自由に描いた。写真2は、音高の違う楽器で表すリズム（譜例2～4）課題を学生が描いたものである。

★譜例2

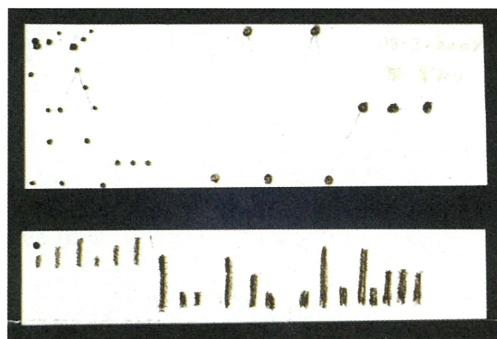


高：音高の高い楽器で奏する
中：中くらいの音高の楽器で奏する
低：音高の低い楽器で奏する

★譜例3



★譜例4



〈写真2〉高低のある音のリズムを描く

〈色の性質を学ぶ〉

リズムや旋律を聴いて想起した感覚や感情を色や形に置き換える練習をするにあたり、色名から色を特定することができたり、混色を得意とする学生とそうでない学生との間では結果にかなりの差が生じることが予想される。そこで中学校美術科で学ぶ範囲の基礎的な色彩の知識を復習することで、色の秩序を把握し、色のイメージの幅を広げられるように、次のような

ワークシート学習を行った。

- ①色の三属性（色相・明度・彩度）や色料の三原色について色掛図や色立体を提示しながら解説する。
- ②配色カードを用いて、12色相環とトーン表を各自で作成する。

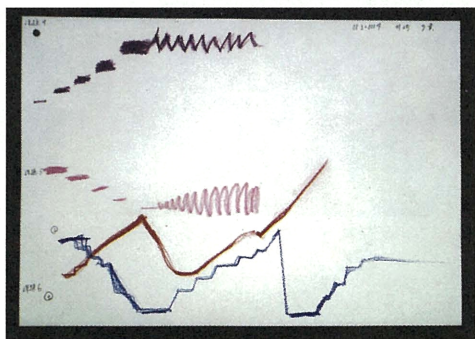
【第10回】

本時では図形楽譜の作成へと導くために、旋律に関する以下の3項目に基づく課題を設定し、五感を集中させて音を描くことを試みた。さらに既習した内容を生かして、楽曲を描画することを試みた。

〈旋律を描く〉—音と点・線・形・色—

(1) 旋律の高低を描く

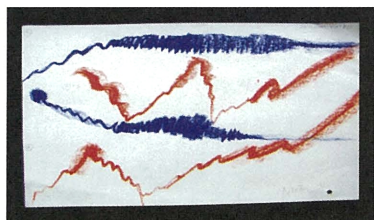
ピアノにより提示される上行形の旋律、下行形の旋律、上下する旋律などを好みの単色のパステルと幅のある線を用いて描いた。写真3はこれらの課題を学生が表したものである。



〈写真3〉 旋律の高低を描く

(2) 強弱のある旋律の高低を描く

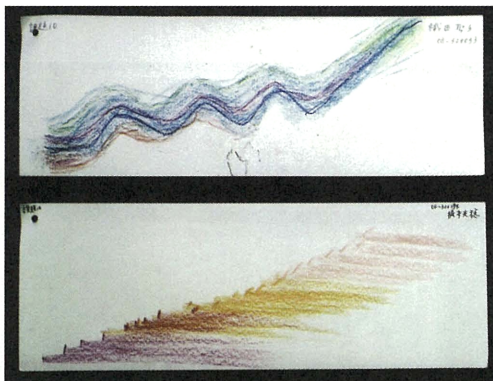
上記(1)の課題に強弱を加えて音源を提示した。写真4は学生が表したものである。



〈写真4〉 強弱のある旋律の高低を描く

(3) 余韻の残る旋律の動きを描く

ダンパーペダルを使用したピアノにより提示される①ペンタトニック（5音音階）②全音音階 ③クラスター（こぶしで鍵盤を押す弾き方）の音のイメージを、好みの色のパステルと濃淡などを用いて自由に描いた。写真5はペンタトニックの音を描いたものであり、写真6はクラスターの音を描いたものである。



〈写真5〉 余韻の残る旋律を描く—ペンタトニック—



〈写真6〉 余韻の残る旋律を描く—クラスター—

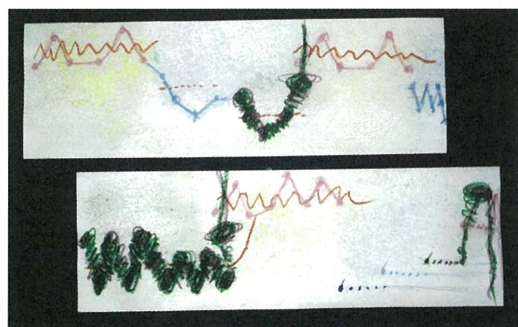
〈楽曲を描画する〉

P. D. Q. Bachの楽曲《Chanson: Toute l'année, hey, hey, hey》⁸⁾を繰り返し聴き取りながらパステルを用いて版画用紙に描く。単に曲の印象ではなく、後で自分自身が描画を見たときに楽曲を思い出せるように、また演奏する手掛かりになるようなものとして表すことを条件とした。

既習の内容を振り返りながら、①リズムや旋律と点や線の関係、②音の高さと色や空間性と

の関係, ③音の質と色や筆触の関係, ④音の強さと点や線の大きさ, 太さ, 筆圧の関係などを意識しながら描くように注意を促した。加えて手首の動きだけで描くのではなく, 楽曲を聴いたときの自然な身体の動きや, 肩から肘全体の動きによって描くように強調した。

次の第11回において, 描画材に水性絵の具を加え⁹⁾, 同様の手順にて作品として仕上げた(写真7)。



〈写真7〉楽曲を聴取して作品を描く

【第11回】

本時では図形楽譜の作成および音具づくり¹⁰⁾へと導くために, 楽曲を作品として描くとともに, 音具づくりに生かせる発音原理を学んだ。

〈音具について学ぶ〉一音と色・素材・形

グループで既成の民族楽器や教員の制作した音具の現物を調べ, ①吹く・吸う, ②叩く・打つ, ③擦る・引っかく, ④振る, ⑤振り回す, ⑥はじくなどの発音原理を知り¹¹⁾, 音具づくりに生かすことのできる知識を得た。また, 音具を制作し, 曲を作り, 図形楽譜に表し, 発表するという各授業内容の関係性を俯瞰的に捉えられるように説明を行った。

【第12回】

本時では, 音楽づくりの参考となる曲の鑑賞を行い, 音具の制作に取りかかった。

〈音楽づくりのための参考曲の鑑賞〉

音楽づくりに向けた参考資料として, CD『音

楽をつくる』(監修・解説 坪能由紀子)より《雨》《木片》《ハウス・ミュージック》の3曲を選び, 聴取した¹²⁾。曲の聴取に際して, リズムや音の重なり, 面白さ, 音色の違い, 全体的な曲のイメージなどに注意を向けて聴くように促した。

〈音具をつくる〉

6名編成のグループに分け, 身近な廃材や日用品を材料として各自が音具を1作制作する。6名でできるかぎり多様な発音原理をもつ音具を考える。また制作するにあたり, ①頑丈につくる, ②美しくつくる, ③音と無関係なもしくは無意味な装飾を施さない, の3点に留意するように指示した。



〈写真8〉音具をつくる学生たち

【第13回】

本時では前回に続いて音具の制作を行うとともに, 音楽づくりの基礎となる基本的な音楽形式を学んだ。また, グループで音楽を作るときに留意点を説明し, 完成した音具を用いて音楽づくりを行った。さらに創作した曲を色や形に変換して表すために, 参考となる既成の図形楽譜の鑑賞を行った。

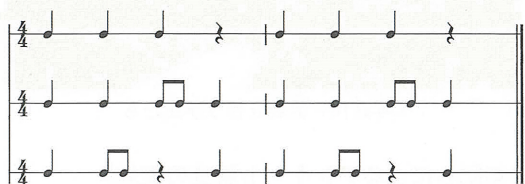
〈基本的な音楽形式を学ぶ〉

音楽形式としては, フレーズに繰り返しのあるもの(A-A-B)や, ロンド形式(A-B-A-C-A, A-B-A-C-A-B-A)やカノンなどを説明した。音楽に変化をつける工夫として,

リズムの重なり、テンポの変化、音の強弱などを用いることについて説明を行った。

上記の内容を理解するために、譜例5のリズムパターンを手拍子によるリズムアンサンブルで体験し、音の重なりや強弱、テンポの変化を学んだ。

★譜例5



音具を用いたグループでの音楽づくりに際して、以下のような留意点を示唆した¹³⁾。

- ①どんな形式を用いた音楽にするかを話し合う。
- ②音楽の始め方、終わり方について話し合う。
- ③楽しい、悲しい、明るい、暗いなど、どんな感じのする音楽にするかを考え、話し合う。
- ④盛り上がる部分や静かな部分を工夫する。
- ⑤音楽に変化をつける方法を考える。

〈図形楽譜の紹介と鑑賞〉

創作した自分たちの音楽を、色や形に変換して表現する参考として、現代の図形楽譜を大きく3つに分類¹⁴⁾して紹介し、パワーポイントを用いた鑑賞を行った。紹介した作品の作者は次の通りである。

- ①五線譜を図案化したもの：G. クラム, S. ブソッティ, J. ケージ
- ②図形と五線譜記譜法を併用したもの：J. ステッド, L. クプコヴィッチ, M. シェーファー
- ③全面的に図形によるもの：小杉武久, T. ジョンソン, R. H. ラマティ

これらの作品に対して、以下の3点に注目しながら鑑賞するように促した。

- ①描かれているものの空間性（紙の上下左右の位置空間と方向性）から音の高さと時間の流れの方向や速さを想像する、②表されている形態のもつ形状（形、大きさ）や色や濃淡から音の質、大きさ、強さを想像する、③背景の色か

ら音響を想像する。

〈写真9〉鑑賞した図形楽譜の1例

R. H. ラマティ “konstellationen”. 1971

【第14回】〈図形楽譜作成と発表にむけた練習〉

本時は音楽づくりを行いながら描画によって記録してゆき、最終的にはB列本判の画用紙（765mm×1085mm）に楽譜を完成させた¹⁵⁾（写真10・11・12）。さらに、それらの楽譜をもとに発表にむけた演奏の練習を繰り返し行った。音楽づくりに際して、学生から教員に意見や助言を求められた場合は、状況に応じて対応した。



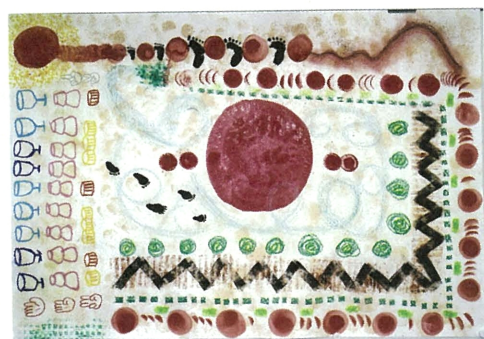
〈写真10〉図形楽譜を描く学生たち



〈写真11〉完成した図形楽譜①



〈写真12〉完成した図形楽譜②



〈写真13〉完成した図形楽譜③

【第15回】〈発表と合評〉

グループごとに作品の発表を行った。各クラスのグループのテーマを以下に挙げる。

【Aクラス】①海辺の祭り②海のお話（お魚のお話）③レッツ・クッキング④汽車の旅⑤音の行進⑥夏の1日

【Bクラス】①Japanese 侍（写真13）②サバンの生と死③Unity④夏祭り（写真11）⑤無題⑥夜の海辺の祭り（写真12）



〈写真14〉発表を行う学生たち

〈無記名によるアンケート調査の実施〉

各グループごとの発表後、学生同士で感想を述べ合い、教員が講評を行った。その後、学生の意識変化や授業の感想を知るために、無記名によるアンケート調査（資料1）を実施した。アンケートの内容は、①本授業の5つのねらいがどの程度達成できたかを照応する12の質問項目に5段階評価で答えるもの、②授業の一連の活動内容から、楽しいと感じたこと、難しいと感じたことを選択させるもの、③自由記述、で構成した。

4. 考察 ―授業実践と意識調査に基づいて―

前章では学生の資質、能力の向上を目的とした本科目のねらいと第9回～15回の授業内容について述べた。本章では、授業実践に際して設定した5つのねらいがどのように達成されたかを、実践結果と作品及び最終回に行った学生への意識調査を基にして考察する。

(1) 授業を通して、固定化された感性の開放はみられたか

これまで受けてきた音楽教育や造形（美術）教育を通して、「教科」の枠組みの意識は色濃く根づいており、音楽と造形を全く別の性格や内容の表現活動として捉えている学生は少ない。勿論両者にはそれぞれ固有の美学と構造があるには違いないが、一方で多くの共通性もあわせもっている。その共通項を体験を通して感じ取り、分断されている感覚や感性を結びつけて開かせていくことが本科目の大きなねらい

であった。特に音楽では、学生は西洋の楽音を中心とする規範に縛られている傾向があり、表現活動も既成作品を演奏して再現することが中心となる。造形では音楽に見られるほどの強い規範意識はないが、見えているもの、見たものを表そうとする「再現表現」が中心であるのは同様である。したがって色や形も、見えている実物の色や形に近いかが問題となる。学生は授業を通してこのような感じ方、考え方、表し方を開放し、今までとは異なる感じ方、表し方ができるようになったであろうか。アンケートや作品から見てゆく。

表3の3項「音や音楽を色や形で感じ、表すことができるようになった」や11項「表現についての感じ方、考え方が少し変わった」がともに4.0と比較的高いポイントであることや、自由記述の表6及び表7からは、不十分ながらも学生が固定化された感性を開放しようと試みている様子がみてとれる。しかし、前掲の図形楽譜(写真11)に見られるように、描画として融合させながらも、ト音記号やヘ音記号を描いてしまう行為は、西洋音楽に固定化された枠組みから開放することの難しさを示しているといえよう。また、表3の4項「色や形などから音や音楽を感じ、表すことの楽しさを味わった」(3.8ポイント)が3項(4.0ポイント)に比べると低かったのは、授業内容にこのような課題が含まれていなかったことも一要因であると考えられる。この点は今後の課題としたい。

(2) 音・色・形・手触り・動き・空間などを関連づける表現がなされたか

音を描画する導入の段階で、他者に伝えることを意識して自分なりの一定のルールをつくるように促した。各々の要素が決して一対で対応するものではないが、ややもすると「何となく」や「フィーリング」などといった全体の印象画、感想画になり、曖昧に陥ることを避けるためである。音やメロディーの一音一音や構成を聴きわけることに集中し、それぞれの色や形や動きを突き詰めようとする対峙の内的体験が感性を磨ぐと考える。

第10回の授業で行った楽曲描画に用いた曲の

特徴は、クラリネットの緩やかな主旋律と管楽器の装飾的な旋律が絡みあう中にマウスピースだけをつかった12音階以外の音が入ってくるところにある。多くの学生がその特徴や変化をよく捉えており(写真7)、表8にも「音色などを紙に表現することによって、音の高低、音色、性質などについて分かるようになった」の記述が見受けられた。また表3の2項「リズムや音高、旋律を点・線や形、色で感じ、表すことができるようになった」や、3項「音や音楽を色や形で感じ、表すことができるようになった」がともに4.0ポイントであることや、7項「音、色、形を統合しながら現すことの楽しさを味わった」は4.3ポイントと高いことから、概ね、学生は音・色…を関連付けながら表すことを体験し、それを楽しいと感じられるようになっていることがわかる。しかし、一方で表5、表7より「リズムを描く」「音高を描く」「図形楽譜を描く」などが難しいと感じることの3、4、5位に挙げられていることから、短絡的な判断は差し控えたい。

(3) グループによる創作活動を通して、学生は表現する楽しさを味わっていたか

表現における豊かな創造性や感性は、自己表現を通してだけでなく、他者の表現に気づくことや、やりとりの中で共に表現する楽しさや感動を共有することにより、養われ深められてゆく。授業では、グループ活動による他者の表現への気づきや、共に表現する楽しさの体験を通して、学生が将来保育者として子どもの表現の育ちを見据え、他の子どもの表現に触れられるような配慮や工夫をする力を身につけることをねらいの一つとしている。

アンケート結果より、授業において学生たちが楽しいと感じたことの多くは、グループ活動に関するものであることが明らかである。表3では、9項「発表に向けた音楽づくりを通してグループのメンバーとのコミュニケーションが活発になった」や8項「グループ活動によって、音具や楽譜をもとにした音楽づくりのアイデアやイメージが、より豊かに広がった」のポイントが高く、上位を占めている。また、表4では

授業において楽しいと感じたことに「グループ活動」を挙げた学生が67名中55名と高い割合を占めている。自由記述においても「グループ活動をしていて、音を絵に表すのは楽しいと感じました」(表8)や「自分なりに感じたように表して、人とくらべてみたときに、『なるほどそんな表し方もあるのか』という発見がたくさんあって楽しかったです」(表6),「自分では思いつかなかった表現を知ることができました」(表7),「いろいろな人の作品を見るのは、すごく楽しかったし、その人の個性が出ていて面白かったです」(表9)など、グループ活動を通して他者の表現に気づいたり、共に表現する楽しさの体験を味わっていることがうかがえる。

また、「この授業を通して子どもの気持ちに少しでも近づけたと思います」「リズムを絵に表現するというのは初めての経験で難しかったけど、表現の仕方が豊かになれたような気がします。将来、この授業で学んだことを生かしていきたいと思います」(表6)という記述からは、保育者として身につけるべき力を意識しながら学ぶ学生の姿勢がみてとれる。さらに、「グループ活動がとても楽しかった。一人で作成したものより、みんなで作成したものの方が好きだった。そしてその過程も面白く感じた」(表8)という記述からは、表現された結果だけでなく、その過程が大切であることを学生自身が体験的に捉えていることがうかがえる。今後の学生の成長に、本授業が生かされることが望まれる。

- (4) 素材から見つけた音の音色やリズム、音の重なりなどの面白さを感じて表現していたか
音具づくりの過程において、学生たちは缶やガラスビンや段ボール箱を叩いたり、輪ゴムを弦に見立ててはじいたり、小石や小豆、大豆を入れたペットボトルや缶を振ったりなどして、さまざまな素材から積極的に音を見つけようと試みていた。また、そうして見つけた音をグループのメンバーと重ね合ったり、リズムの変化を模索したりしながら、音楽づくりを進めていった。そのような過程を経て出来上がった作品には、軽やかなリズムの重なりが効果的に表

現されたものや、音色の重なりが美しく、耳に心地よく感じられるものがみられた。

授業後のアンケート結果からは、表3の5項「音具について考え、親しむ機会となった」(4.5ポイント)や7項「音、色、形を統合しながら表すことの楽しさを味わった」(4.3ポイント)などが高いポイントであることや、表4では授業において楽しかったことの2位に「音具づくり」が挙げられるなど、学生たちは楽しみながら音具づくりや音楽づくりを体験していたことがうかがえる。また、自由記述においては「今までは楽器になるなんて思わなかったものが、キレイな音や面白い音が出るのが知れてよい体験になりました」(表6),「自分が音をどのように表せばいいかを考えるのは難しかったけれど楽しかったし、このような表し方もあると発見する部分もありました」(表7),「グループでリズムを考えたり音具をつくるのが楽しかったです」「一人でするよりも、仲間と共にやった方がいろんな形の音楽が表現できると思います」(表8)など、仲間とのやりとりを通して音楽づくりの楽しさや発見がもたらされたことがみてとれる。一方、表5で「楽曲づくり」が授業において難しいと感じたことの2位に挙げられていることから、音を見つけながら音具をつくることは興味深く楽しいが、それを楽曲にまとめることは難しいと学生が感じていることが理解できた。曲づくりのヒントや助言など、教員からのサポートも今後の課題としたい。

- (5) 保育に用いる描画材料や用具に親しみ、その特性を生かした表し方を工夫していたか

子どもたちが感じたことや思いを目に見える色や形として表すには、何かしらの「もの」としての表現媒体(メディア)が必要である。学生にとっては、保育現場で備えられている描画材料や用具に触れ、その特性を熟知しておくことが、保育者として子どもの表現の可能性を予測し、活動を支える力となる。

この授業では保育で使用される材料、用具であるが、①他の造形科目の授業で体験する機会がない。②音刺激によって喚起される感覚の特徴を表しやすい。の2つ理由からコンテパステ

ルとスポンジ筆・スポンジローラーを用いる描画体験もねらいとした。

まず、学生からの反応として目立ったのは、大方の学生がパステルの使用が始めてであったため、最初は使用すること自体が珍しく楽しいという様子であった。パスやクレヨンとは異なるサラサラした感触が気持ちよく、その感触を楽しむことで描画意欲も湧いたようである。前掲の写真1～7の作品で見られるように、多くの学生がパステルの形状である四角の形を利用して、①小口や腹を使う、角を使うなどして線の太さを描き分ける、②筆圧を使い分けて明瞭な線やかすれた線などを表す、③鋭角的なジグザグ線と滑らかな曲線の違いを表す、④描いた線や面をこすってばかす、⑤二色以上を重ねて描く、混ぜ合わせて混色するなどの多様な表し方の工夫をすることができた。

スポンジ筆やスポンジローラーの使用も、パステルと同様に初めての体験である学生がほとんどであったため、その柔らかな感触が大変魅力になっていた。スポンジ筆やローラーの表現効果は特に絵の具の濃度や圧力で左右されるが、下書き用の紙に何度も試し描きをしている姿が全てのグループで見受けられた。スポンジ筆のスタンピングから連想して手のスタンピングに興じるグループもあった。(写真10)

以上のような様々な技法の試行が単に視覚的な効果の実験として完結するのではなく、聴き分けた音の感じの違いを何とかして表そうとして探られたことに意味があると考ええる。

5. まとめと今後の課題

今回われわれが行った授業の題材自体は、とりわけて新しいものではない。美術教育においては既に20年近く前に『美育文化』が「音・子ども・造形」の特集を組んでいる¹⁵⁾。その誌上で水島、岡田、谷中、佐々木らが当時の音と造形をめぐる状況と小学校「図画工作」科や中学校「美術」科での実践である音具の制作と合奏、図形楽譜の制作、音楽鑑賞画の制作などの取り組みを紹介しており、方法についてそこから大いに示唆を受けた。しかしその後、「はじめに」

でも触れたように教育現場において音楽と造形表現の相互交流の課題が深められ、進展したとは必ずしも言いがたい状況がある。

特に幼稚園教諭や保育士を養成する教育課程において、再現可能な総合的「表現」の指導法の確立は強く望まれるところである。その糸口として本学科での授業実践を可能な限り詳細に記述し、詳しい授業計画が把握され吟味の対象となり得るように努めた。

7回の授業で表現された一連の学生の作品を見るとき、音の様々な性質の違いを聴き分ける事のできた学生の描画ほど、線や色や構成が変化に富んだものとなり、結果として造形的にも面白く美しい作品が生まれる傾向が顕著であった。豊かな表現は、やはり身の周りの様々な現象の小さな違いに気付くことから始まるのである。

そして、音や色、形の世界を知覚して認識するときに、刺激に対応する特定の感覚器官だけを働かせるのではなく、異なる他の感覚器官を共に意識的に働かせながら、異なる形式に変換して表現することによって、特定の感覚にも揺さぶりをかけ感性を広げることができるのである。

今回の反省として最も重要と考えるのは、身の回りの音を描画する活動に、自然音を取り込むことができなかったことである。子どもの音環境として欠かかすことのできない、また取り戻さなければならない自然音をどのように教材化するかである。さらには、色や形を音として表現する逆方向の変換の内容、身体の動きとの連関について明瞭に自覚できる方法を検討したい。

〈註〉

- 1) 椋田敏史「幼児教育における総合的な表現について」兵庫教育大学 体育・芸術教育学系美術分野「感覚をつなげてひろく芸術教育を考える会」編『第1回研究会報告集』2008 p. 15
- 2) ①日本保育学会第58回大会論集「保育者養成において『表現』をどのように指導するか(1)主に音楽的側面に関して」2005 pp. 48-49
②日本保育学会第59回大会論集「保育者養成

- において『表現』をどのように指導するか(2) 学生の歌唱指導についての共通理解を求めて」2006 pp. 52-53 ③日本保育学会第60回大会論集「保育者養成において『表現』をどのように指導するか(3) 学生の歌唱における『声』の指導について」2007 pp. 150-151 ④日本保育学会第61回大会自主シンポジウム「保育者養成において『表現』をどのように指導するか(4) なぜ、なんのために、どう歌うのか」2008 p. 116
- 3) 今川恭子・宇佐美明子・志民一成 編著『こどもの表現を見る、育てる—音楽と造形の視点から』文化書房博文社 2005
 - 4) 宇佐美明子・神原雅之「保育者要請における『保育内容表現』の授業改善」『国立音楽大学研究紀要』第42集 2007 pp. 101-112
 - 5) コンテパステルはバスやクレヨンに比べてサラサラした感触で伸びがよく、混色やこする、ぼかすなどの操作がしやすい。
 - 6) 画用紙は横位置に使用して、縦方向を音高軸、横方向を時間軸とすることを共通のルールとした。
 - 7) 楽器を見ることによりイメージが固定化されぬように、音源の提示は、学生から見えないように行った。
 - 8) この曲の日本語訳は、『シャンソン：全ての年にヘイ、ヘイ、ヘイ』である。尚、この曲の選曲理由は、①長さが適当である（1分11秒）、②音の高低が聞き分けやすい、③曲中に既成楽器らしくない音色が含まれている、などである。
 - 9) 水性絵の具の性質を活かしたドリッピング技法やスパッタリング技法を体験し、音の性質を効果的に表現する方法を考えさせた。表現する内容が、用いるメディアの特性から影響を受けることに気付かせるねらいもある。
 - 10) 本稿では、音具を西洋音階とは異なる音源を得るためにつくられた道具と考え、民族楽器もふくめることとした。松平頼暁「音具の発明」『20.5世紀の音楽』青土社 1982 pp. 169-174
 - 11) 発音の方法による楽器の分類としてはE. ホルンボステルとC. ザックスによる「五分類法（気鳴・体鳴・膜鳴・弦鳴）」などがある。ダイアグラムグループ編、皆川達夫監修『楽器』マル社 1992
 - 12) 《雨》《木片》《ハウスミュージック》の3曲を選曲した理由は、情景を描写している、リズムの繰り返しの面白さがある、音色の違いや音の重なるの面白さがある、身近のものを楽器として取り入れている、などである。
 - 13) 音楽づくりに際する留意点については、坪能由紀子『音楽づくりのアイデア』音楽の友社 1995を参考にした。
 - 14) この3分類方については、佐野光司「図形楽譜」『音楽大事典』平凡社 1982 pp. 1289-1290を参考にした。
 - 15) 共同制作であることと発表の形でクラス全員が鑑賞できる大きさとして、画用紙はB列本判を使用した。また描画材料も、既習のコンテパステル、水性絵の具に、クレヨンを加えた。用具は水彩筆、スパッタリング網の他に、スポンジ筆とスポンジローラーを加え、表現する紙の大きさに無理のない描画用具や、繰り返しが表現しやすい用具を体験できるようにした。
 - 16) 水島尚喜「造形教育における『音』をめぐる」、岡田匡史「音楽と絵画の相互交流による試論—音楽感想画を中心に—」、谷中優「創作音具についての再考」、佐々木薫「『音楽鑑賞画』の中で語る子どもたち」『美育文化』Vol. 39 No. 11 1989 pp. 12-40

表3 授業のねらいに対する学生の5段階評価表

項 目	5段階評価の人数と平均					
	平均	5	4	3	2	1
1 リズムや音高、旋律を聞き取ることができるようになった。	3.9	13	39	13	2	0
2 リズムや音高、旋律を点や線や形、色で感じ、表すことができるようになった。	4.0	17	38	10	2	0
3 音や音楽を色や形で感じ、表すことができるようになった。	4.0	13	39	14	1	0
4 色や形などから音や音楽を感じ、表すことができるようになった。	3.8	11	36	16	4	0
5 音具について考え、親しむ機会となった。	4.5	39	20	5	2	0
6 音具づくりの基本的な知識を得ることができた。	3.9	18	30	16	3	0
7 音、色、形を統合しながら表すことの楽しさを味わった。	4.3	32	26	6	3	0
8 グループ活動によって、音具や楽譜をもとにした音楽づくりのアイデアやイメージが、より豊かに広がった。	4.4	39	20	6	1	0
9 発表に向けた音楽づくりをとおして、グループのメンバーとのコミュニケーションが活発になった。	4.7	49	16	2	0	0
10 子ども（人間）にとって、表現とは何かを考える機会になった。	3.9	11	43	9	4	0
11 表現についての感じ方、考え方が少し変わった。	4.0	12	44	9	2	0
12 子どもの表現活動の環境づくりや指導の方法に反映させたいと思う。	4.2	23	36	6	2	0

表4 授業において楽しいと感じたこと

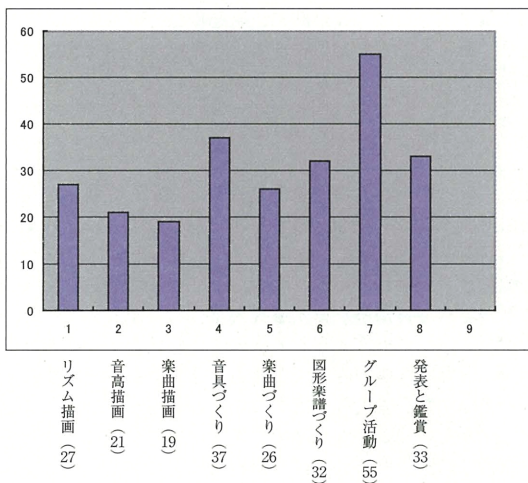


表5 授業において難しいと感じたこと

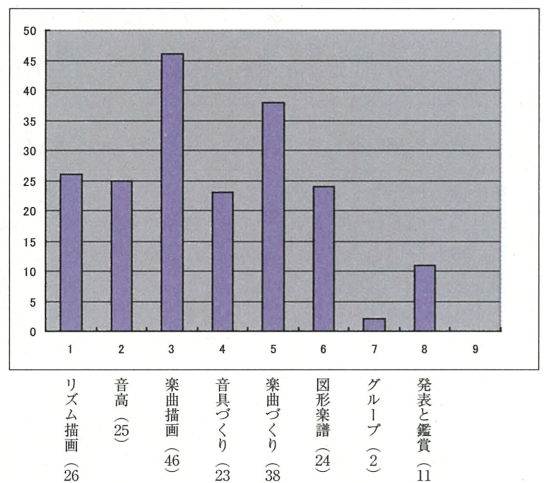


表6—音を描いたり音具を作るのは初めての経験で、発見があった—

〔表6—9は自由記述による〕

●リズムを絵に表現するというのは初めての経験で難しかったけど、表現の仕方が豊かになれたような気がします。将来、この授業で学んだことを生かしていきたいと思います●楽曲を聴いての描写が私にとって納得のできる一枚になったと思います●今までやったことのないことがたくさん経験できました。この授業を通して子どもの気持ちに少しでも近づけたと思います●音やリズムを色や形に表すということをあまりやったことがなかったので、少し難しかったですが、とても楽しんでできました●音具を作り、楽曲を作り、発表をしたのはとても楽しかったです。他の人がどんなふうにも音やリズムをとらえ、表現しているのかがよく分かって面白かったです●高校までの美術（図工）と音楽が合わさったような新しい感じの授業でした●音を色や形で表現するのは初めてで、最初はすごくとまどいました。でも自分なりに感じたように表して、人とくらべてみたときに、「なるほど、そんな表し方もあるのか」という発見がたくさんあって楽しかったです●今までは、楽器になるなんて思わなかったものが、キレイな音やおもしろい音が出ることを知れてよい体験になりました。グループの人と楽しく作業ができ、とても良い体験となりました●音を描くことで表すのがすごく楽しかったです●絵で音を表すことは初めてやったので、全然要領をつかめないままおわってしまったけれど、いろいろ学べて楽しかったです●音楽を図などで表す体験は初めてだったので毎回わくわくしました。とても楽しかったし、音具のしくみがよくわかりました●音色などを紙に描くことによって、音の高低、音色、性質などについて分かるようになった。

表7—視野が広がった、表現の意味がわかったような気がした—

●思い切った大胆な表現をすることがなかなかできなかったもので、この授業で大胆な表現をすることを学べました●自分では思いつかなかった表現を知ることができました●今まで知らなかったような音具や音楽について理解することができ、視野が広がりました。友達と協力して何かを作りあげるといった達成感も得ることができました●本当に表現を学ぶことができる授業だと思いました。自分が音をどのように表せばいいか考えるのは難しかったけど楽しかったし、このような表し方もあると発見する部分もありました●とても楽しい授業でした。音の高低やリズムを聞いてイメージをふくらませるのが楽しかった。表現という意味が前より少し分かったような気がします。

表8—グループで活動することによって表現が広がり、楽しかった—

●みんなでいろいろなイメージを共有して一つの音楽を作ったのが楽しかったです●グループでリズムを考えたり音具を作るのが楽しかったです●発表を鑑賞するのが楽しかった。自分たちのグループの時も楽しくできた。グループ活動はとても勉強になった●グループで何かを完成させるというのが楽しかった●グループ活動がとても楽しかった。一人で作成したものより、みんなで作成したものの方が好きだった。そしてその過程も面白く感じた●音を色や形で表すなんて無理だと初めは思っていたけれど、グループ活動をしていて、音を絵に表すのは楽しいなと感じました●とくに図形楽譜に言えることですが、みんなそれぞれを表現しつつ思い切りのよい作品を作った後、楽しかったとグループのみんなそれぞれが言っていました。もちろん私もとても楽しかったです●特にグループ活動が楽しかったです。一人でするよりも、みんな仲間と共にやった方がいろんな形の「音楽」が表現できると思います●グループでの音具づくりは、初めはすごくとまどったけど、回を重ねていくうちに、みんなとも仲良くなれたし、楽しくなりました●この授業は、楽しくできたと思います。それぞれの発表までの準備は大変だったけれど、みんなの発表を見れたのは面白かったし、とても勉強になりました。

表9—創作活動の楽しさや難しさ、完成時の達成感を感じた—

●自分で何かをつくる難しさと楽しさがわかりました。また、いろいろな人の作品を見るのは、すごく楽しかったし、その人の個性が出ていて、おもしろかったです●自由であることの楽しさと難しさを感じたように思いました●自分らしい作品を作ることに自信がつき、これから物作りに自ら取り組みたいと思えるようになった●音程やリズムなど最初はよく分からなくて、描くことも難しかったけれど、少しずつ慣れていって最後に使った大きい楽譜はみんなのイメージを合わせて作り上げることができて良かったです●音楽を作るのが大変だった。一人ひとり音のイメージや色が違うので、まとめるのが大変だった。でも完成したときの達成感はあった。●最初はあまり面白くないかなと思ったけど、自分の手で音具を作ったり、班のみんなと協力する中でだんだん感じられるようになりました。出来上がった時の達成感がよかったです●一人での楽譜作りのとき、色や形をどのように描くかということも考えました。どう表現したら一番合うかということが想像できませんでした●この授業は、楽譜といっても図形なので、なかなか上手に思っていた通りに表現するのが難しかったです。

資料 1

<音楽と造形の共感覚と総合表現についての授業アンケート>

◆後半の発表Ⅱの授業を受講して、総合表現についての下記の項目に対し該当する数字に○をつけて下さい。

(5：非常にそう思う、4：そう思う、3：普通、2：あまり思わない、1：全く思わない)

項 目	評 価				
1. リズムや音高、旋律を聞き取ることができるようになった。	5	4	3	2	1
2. リズムや音高、旋律を点や線や形、色で感じ、表すことができるようになった。	5	4	3	2	1
3. 音や音楽を色や形で感じ、表すことができるようになった。	5	4	3	2	1
4. 色や形などから音や音楽を感じ、表すことができるようになった。	5	4	3	2	1
5. 音具について考え、親しむ機会になった。	5	4	3	2	1
6. 音楽づくりの基本的な知識を得ることができた。	5	4	3	2	1
7. 音、色、形を統合しながら表すことの楽しさを味わった。	5	4	3	2	1
8. グループ活動によって、音具や楽譜をもとにした音楽づくりのアイデアやイメージが、より豊かに広がった。	5	4	3	2	1
9. 発表に向けた音楽づくりをとおして、グループのメンバーとのコミュニケーションが活発になった。	5	4	3	2	1
10. 子ども（人間）にとって、表現とは何かを考える機会になった。	5	4	3	2	1
11. 表現についての感じ方、考え方が少し変わった。	5	4	3	2	1
12. 子どもの表現活動への環境づくりや指導の方法に反映させたいと思う。	5	4	3	2	1

◆次の設問に対し該当する番号に○をつけてください。(複数回答可)

【A】授業の中で楽しいと感じたことは、どのようなことですか？

1. リズムを聴いて描画したこと。
2. 音高を聴いて描画したこと。
3. 楽曲を聴いて描画したこと。
4. 音具づくり
5. 楽曲づくり
6. 図形楽譜づくり
7. グループ活動
8. 発表と鑑賞
9. その他 ()

【B】授業の中で難しいと感じたことは、どのようなことですか？

1. リズムを聴いて描画したこと。
2. 音高を聴いて描画したこと。
3. 楽曲を聴いて描画したこと。
4. 音具づくり
5. 楽曲づくり
6. 図形楽譜づくり
7. グループ活動
8. 発表と鑑賞
9. その他 ()

◆全体の活動の中で、特に工夫したことを書いてください。

◆この授業全体に対する感想や意見がありましたら自由に書いてください。